

さくさくと草を掻き分ける足音がする——そこは道というにはあまりにも傲慢なただの草むらだった。木々にすっかり空をおおわれ、昼間だというのに太陽の恩恵にも恵まれないその場所を、茶色いマントをまとった青年がゆつくりと歩いていた。

名をヘイトといった。

「どうするんだ」

声が出た。すこし高音の音域でぴりりと空気を振るわせる。

「うーん、どうしようか」

ヘイトがつぶやいた。それは確かに先の声に答えるものだった。しかし、周りに彼以外の影はない。ただ木々がその葉を連ね、覆い茂っているだけだ。

「このままじゃ仕事ができないよね」

「チガウ、そういうことじゃない」高音の声はすこし語気を強める。

「着いてきている」

「え、——ああ、そうだね」ヘイトは微笑んで答えた。

さくさくと、草根を掻き分ける足音はまだ続いている。

「そうだね、じゃない。どうするんだ」

「うーん」

いつまでたつてもヘイトはただ一人きり木々の間を歩いているように見えた。

「まあ、利用するっていう手が、あるよね」

そう言ってヘイトは自分の胸元を覗き込んだ。同時に歩く速度をぐっと速める。ざざざと草を踏み分け進むその足取りは、軽やかで迅速だった。さくさくと響いていた足音があわてたようにそれを追いかける。——そして。

「あつ！」

ヘイトでも、高音でもない、声が出た。声の主——キリの目の前が急に暗闇へ包まれる。彼はあまりの緊張に、つま先から首筋までがパツンと張り詰めたような錯覚を覚えた。

「えっ!？」

自分の身がどうなったのか判断できず、身体を硬直させる。そうでなくても、指の一本さえも彼の指示通りには動かなかった。ゆつくりと視界がその機能を回復させる。額から汗がどっと噴出してきた。

キリの目の前には、青年がひどく優しい笑顔をたたえて立っている。首に圧迫感を覚えたが、視線のひとつもキリの自由にはならない。おかしい浮遊感に両足を必死で掻いてみると——なんてことだ、地面が見つからない。

「どういうつもりだ」

「ひっ」

凄みの聞いたすこし高音の声にささやかれ、キリはつぶれたカエルのような声を上げた。

「殺されたいか？」

「ひいつ!!」

「イータ、やめなつて。脅かしちゃ悪いよ」

目の前の青年——ヘイトは笑顔のまま、キリへと一歩近づく。

「離してあげて」

ヘイトがそう言うと、同時にキリの圧迫感が解かれた。彼はボトリと地面に投げ出され、そのまま、へたれこんでしまう。小さくなった身体はガクガクと震え、自分を拘束していた者を振り返る力もないようだった。

「大丈夫ですか？」ヘイトはひざを付きキリを覗き込む。

「あなたは——町の門番さんですよ。なんで、ボクをつけていたのですか？」顔を上げると、微笑むヘイトの深い青色の瞳がキリの視界に入り込んでくる。その穏やかな光に、ふっとキリの緊張が解ける。

「す、すみません……」力なく、キリは頭をたれた。

「謝らなくてもいいですよ。なにか事情があったのでしょう？」

「………」

ドクン——鼓動が駆け足でキリをせかしはじめる。言おうか、言うまいか。いや、言うべきだ。震えながら顔を上げた。

「あ、あなたを殺すように言われていました」

「——へえ、そうなんですか」

まるで世間話でもするように、ヘイトは言った。先ほどと変わらない穏やかな笑顔で、キリを覗き込んでいる。

「でも、あなたに、ボクは殺せませんよ」

「………はい」

キリはうなだれた。今日町を訪れた者は一人残らず殺すこと、そんな指令を若い門番が受けたのはつい昨日のことだ。それを実行しない者には同じように死がおとずれると、驚く罰則まで言い渡された。一日で、通常の倍以上の賃金が手に入ることに目がくらんだせいで、まさか人を殺さなければならなくなるなんて——キリは打ちひしがれていた。願わくば、自分の手を汚すことにならないようにと、朝からずっと祈り続けていた。しかし、神は時に残酷だ。

——やはり自分に人など殺せるわけがなかったんだ。

キリの瞳から大粒の涙が流れ落ちる。草むらについた両手の上にぽつぽつと水滴が落ち、その上から引きつった声が漏れ始めた。小さな獣の鳴き声のようだ、——ヘイトは思った。そして言った。

「ボクは貴方を殺せますよ」  
はじかれるようにキリが顔を上げる。

「殺そうと思えばひと思いに。苦しませないで逝かせてあげられますよ」  
見上げたその顔は、やはり笑顔だった。ヘイトの右手には見覚えのある大槍が握られている。それは、自分がすこし前に掲げていたものだ。そう、ヘイトを殺すために――キリは背筋が冷たくなるような寒気を覚えた。

「こ、殺す……？」  
「そうですよ。当たり前じゃないですか。自分が殺されそうになっているのに、何もしない人なんていますか」

ヘイトは笑顔のまま、大槍を天にかざした。ギリリと木漏れ日に照らされた槍の先端がそのまままっすぐ自分を狙っている。

「ひいっ！」  
キリは飛び上がり震え上がった。しりもちをついたような格好で逃げようともがいたが、腰が抜けてしまっているようでもまったく先に進まない。

「や、や、や、止めてくれ！ 殺さないでくれ！」  
「死にたくないですか？」

「し、し、死にたくない。死にたくない！ 助けてくれ！」ヘイトは槍をおろし、地べたに這うキリへ、笑いかけた。

「わかりました。じゃあ、協力してくれませんか」  
キリは命乞いをするようにうなづいた。命の糸をつなぐことに必死で、ヘイトの眼光に宿る、ほくそ笑むような暗がり気づくことは出来なかった。

再び、ざくざくと深い草木を分けて歩く音がしていた。

「おい」声がした。高い声だった。

「なに？」別の声がした。澄んだ声だった。

「悪いやつだ、お前ハ」

「そう？」

「アイツ、真っ青だっタ」

「人を殺そうとするほうが悪い」

「そうカ、ヒヒヒ」

嘲りを含んだ奇妙な笑い声が途切れたとき、ヘイトは歩みを止めた。周りには誰もいない。ただ目前に高々と、大きなレンガ造りの壁がそびえていた。

「なんだよ、これ。壁しかないじゃないか」

むっつりと顔をしかめ、ヘイトは壁をにらみつける。

「へえ、騙されたのカ？」声が笑った。

「それはないな。アイツは、そんな度胸がある人間じゃない」

そういうと、ヘイトは石造りの壁に手を添えた。じっと目を閉じて、ひんやりとした感触を手のひらで確認する。

「……壊せそうには、ないか」

「どうすんだ？」

「どうしようか」

ヘイトは一束とび出た前髪を指先でつまみ、くるくると無造作に回転させる。

「そうだ、イータ!!」

しばらくしてひらめいたように目を丸く開き、茶色の布におおわれた胸元を覗き込んだ。

「イータ、頼むよ!!」

「……イヤダ」声が不満そうにつぶやいた。

「そこをさ、なんとかしてよ」

ヘイトは右胸の辺りをぼしとたたき、にんまりと口角を引き上げる。

「なんで、おれサマがそんなことしなきゃいけないんだ!!」

「頼むよ。このままじゃあ、頼まれた仕事ができないんだよ」

「知ったことカ!」

「……ご飯食べられないんだよ?」

「知ったことカ!」

「……イータ」

「……」

「——わかった」ヘイトは軽く息を吐き、さも寂しそうに肩を落とした。

「二人で、飢え死にだね」

「ちよつとマテ!!」

胸元から大声が聞こえ、ヘイトはニコリと笑ってマントをひるがえした。

大都市ライラックから、馬車で十数時間揺られた後、また徒歩で数時間かけてやっとたどり着く、森林の奥にある町、イナマ。ほんの小さな集落から発展した町だ。立地条件が悪く、独自の生産物もないことから大きな賑わいは見せなかったが、町民は皆一様に、見所といえれば町のすぐそばにある澄んだ湖くらいしかない、まるで秘境のようなこの場所を心から愛していた。どこから湧き出てきているのか、特に手入れもされていないその湖は、町が出来上がるずっとまえからそこにあり、いまも変わらず水面にキラキラとした光を走らせている。イナマは、類稀に見る美しい町であった。

城壁に囲まれた門を入ると、小さな商店がポツリポツリと点在している。そこでは野菜や着物、調味料などが、のんびりとした空気の中、のんびりとした店員たちによって、のんびりと売りに出されている。商店街と称されるその場所から、

道を一本はいるとすぐに住宅街となっており、豊富な木材で建てられた家々が整然と軒をつらね、うわべに塗られた暖色の塗料が太陽の日にあそばれゆらゆらと表情を変える。舗装された道も色味が暖色に統一されており、町の彩と雰囲気がびたりと融合しているように見える。

ヘイトは並ぶ家々の隙間に身をひそめ、そんな美しい町をこっそりとのぞいていた。

「すごいね、なかなか良い町だ」

そう言って後ろを振り返る。家と大きな城壁の間にぽつんと立つ小さな影があった。

「知ったことか！」

影は声を上げた。——それは、身の丈がヘイトの半分もない、小さな子供だった。小麦色の肌とつやのある黒髪をもち、子供ながら精悍な顔立ちをしている。

真っ黒な布キレを全身に巻きつけたその黒い瞳は、子供らしからぬいきおいで見開かれていた。

「おれサマ疲れタ！」

「はいはい。さて、……どこに行こうか」

「メシ！」子供は右手を高々と上げ、主張した。

「はいはい。その前に、酒場に行くよ」

「酒場!? 昼間から飲むの力？」

「……違うよ、イータ」

「他になにすルんだ、酒場は飲むところダロ？」

イータと呼ばれた子供が、眉を寄せヘイトをにらみつけたので、ヘイトは子供の前に人差し指をピンと立てて見せた。

「情報収集だよ。お仕事はすばやく済ませないとね」

「……子ども扱いるナ」そして、子供の眉がますますしかめられた。

「はいはい。行くよ、イータ」

そうして二人は歩き出した。建物の裏をつたい、足音を最小限に抑え、人に見つからないよう、こっそりと動いた。

「地図によれば、酒場は奥のほうだったはずだ」

壁にへばるつくようにして歩きながら、ヘイトはイータを振り返った。身体の小さいイータはとくに不便もなさそうに、狭い隙間をすたすたと歩いている。

「酒場に行って、誰かに見つかつたら、どうするんだ」

「でも誰かに居場所を聞かないと、お仕事が出来ないじゃないか」

「適当に探せばいいじゃないか」

「そんなことをしたら、もっと町人に怪しまれちゃうよ。ボクらはさ、相手の顔もわからないんだし」

「ブン。そんな依頼、受けるべきじゃなかったナ」  
イータは地面をしたたかにけりつける。

「仕方ないじゃないか、破格の依頼だったんだから!!」

「内容を選ぶべきダ！」

「だってお金が欲しいじゃないか！」

「——この、守銭奴めガ」

「なにそれ、ほめ言葉？」

「ばかヤロウ」

とにかく、とヘイトは不毛な会話をばっさり切り捨てる。

アンダールクス

「はやく『伝説の悪魔使い』さんを探して手紙を届けなきゃね」

遠足に行く小さな子供のような調子でヘイトは言った。

イータは意気揚々と進むヘイトの背中を憎憎しげににらみ付ける。

裏道を進むと、住宅街からすこし外れた、冷たい空気の流れる場所にたどり着いた。建物の表情が住宅のそれから繁華街のそれへと様変わりする。そこはどこか、隠された欲望をはらんだように、ひっそりと存在していた。

「このあたりだ」

そこで初めて、ヘイトは建物の裏から抜けだした。イータがひよいと軽く飛んで後へ続いてゆく。あたりを見回すと遠くに酒場の看板がちかちかと光っているのが見えた。道のずっと先の突き当たりだ。

「あれだ」

ヘイトが笑って言った。

「おれサマは戻るヨ」

イータは笑わなかった。

「そうだね、目立つからね」

「……お前も目立つなヨ」

「わかったよ」

おどけて腕を組むヘイトを突くようににらむと、イータはヘイトのマントをひるがえした。見上げれば空はゆっくり夕焼けに向け茜がかっている。数時間もすれば、日も落ちるだろう——ヘイトはすばやい動作で、マントを首にかけなおした。

「まあ、急ごうか」

独り言のようにつぶやくと、足早に歩き出す。途中幾人か町人とすれ違ったけれど人々は自分の正面ばかりが視界であるとはかりに直進していたため、ヘイトは特に何事もなく酒場へたどり着くことができた。扉を開け中に足を踏み入れる。酒場の主人がカウンターの奥から目を細めてヘイトを見た。

「いらっしやい」

接客をする気もなさそうな表情で挨拶だけを落とし、すぐにカウンターを拭き始める。ヘイトはあたりを見回した。狭い店に机が五つとカウンター席が四つ並んでいる。客は女性一人に男四人、そしてカウンター奥で、今度はグラスを磨いている店主が一人。ヘイトは店内に視線をめぐらせ、おもむろにカウンター席に座った。

「こんにちは」

「注文は？」グラスを拭く手を休めることなく、店主は言った。

「ミルクティーで」

そうヘイトが言うと店主はすこしだけ目を見張り、すぐ表情を戻すとグラスに茶色の液体を注ぐ。その上からドバドバと直接牛乳が注がれてゆく。

「はいよ」

ヘイトの目の前にゴトリと置かれた真っ白な飲み物を、目をしばたいて凝視する。

「——どうも」

そして、笑顔で小銭を店主にわたした。胸元でなにか押し殺すような笑い声が聞こえてきたが、そ知らぬふりで、再び店内に顔をめぐらせる。目の前に置かれた乳白色の飲み物を、とりあえず口元へ運び、飲むか飲まないか考えをめぐらせた——そのときだった。

「や、やめてください！」

甲高い悲鳴が店内を震わせる。

「うるせえ、おとなしくしろ！」

続いて、低くカエルのような声が響いた。

「だまってついてこい！」

「いやです、離して！」

見れば、若い少女が男に無理やり手を引かれているところのようで、遠めに見てもわかる色白の手首に、大きくて毛深い男の指が絡みついている。ひかれていた少女の年齢はまだ十代ほどだろうか。金色の髪にピンクのワンピース、そしてぱっちりと開かれた大きな新緑色の瞳をしている。透き通るように白いほほは、抗うために、ほんのりとピンクに染まっていた。

「てめえ、ただで情報もおうなて甘いんだよっ」

男がこれほどまでにご執着なのも無理はない、またとない美しくはかなげな容姿をもつ美少女だ。少女は必死で抵抗を試みているものの、誰の目にも戦いの勝敗は明らかだった。

ヘイトはその状況を視界の端に収めながら、すばやく視線を店内に走らせる。三人いる男の客はオロオロと落ち着きなく、しかしみな腰を引き、逃げる準備を

整えていた。

「かかわらんほうがいいぞ」

店主が言った。

「あいつは最近町に駐在している警備員だ。酔ったら手が付けられんよ」

「あはは」

ヘイトは店主に向き直り口端を引き上げて見せる。そして白い液体を口に含み、  
おおいに顔をしかめた。

「無償の人助けなんて、趣味じゃありません」

グラスを押し返され、店主が返答のため口を開くその前に、背後で派手な音が響いた。思わずヘイトが顔を向けると、大きな木製の机が倒れ少女がその横にひざを突いている。

「いやです、わたし……わたし……」

最後の抵抗といわんばかりに、床に身体を預け歩くことを拒否する少女を、大男はそのまま引きずってゆくつもりのようなだ。少女は大きな瞳に大粒の涙をたくわえているものの、一粒すら流してなるものかと、必死でこらえているように見えた。

「おい、ヘイト」

胸元でちいさな声が出た。

「なんだいイータ」

ヘイトは小声で答える。

「……どうすんだ」

「どうするもなにも」ふと、少女の潤んだ瞳とヘイトの視線がぶつかる。

「——なにもしないよ」

少女のはかなげな視線を受けながら、ヘイトは言った。ごそごと胸元で何か  
が動く気配がする、胸騒ぎを覚えたヘイトは、あわてて胸元を覗き込んだ。

ガブリ。

「うわあっ!!」

強烈な痛みにも、ヘイトは椅子から飛び上がる。

「イータ!!」

ヘイトは叫び、マントに隠れているそれを胸元から引きずり出してやろうかと  
考えてから、熱のこもった気配を感じ、顔を上げた。

「なんだ、てめえ」

毛むくじやらの腕で、少女をつかんでいる男のキラキラとした目線は、間違い  
なくヘイトに向けられていた。酒が入っているのだから、ほほは真つ赤に紅潮し、  
見開かれた双眸も赤く充血している。

(イータ……やってくれたね)



ヘイトは胸の中で苦笑いをした。そして息を吐くと、大男に向けて両手を挙げてみせる。

「なんでもありませんよ」

「……なに笑ってやがる」

「笑ってませんよ」

ヘイトは笑った。

「このやろツ！」

男は少女の腕を乱暴に開放すると、どすどすと足を響かせてヘイトの目前へと迫った。視界の隅にしりもちをつく少女の姿が見えたが、すぐに男の大きな巨体にさえぎられ、隠れてしまう。

「その顔をやめろ！」

——続く（続きは本編にて）